

平成27年度第4回千葉市文化芸術振興会議議事録

市民局生活文化スポーツ部文化振興課

1 日 時

平成27年11月18日（水） 午前9時30分～午後12時50分

2 開催場所

千葉中央コミュニティセンター8階 会議室「千鳥・海鷗」

3 出席者

（委員） 神野委員、早川委員、椎原委員、関委員、瀬崎委員、高橋委員、林委員、大澤委員、
竹下委員

（事務局） 生活文化スポーツ部長、文化振興課長、文化振興課長補佐、文化振興班主査、
主任主事3名、主事1名

（その他）（公財）千葉市文化振興財団 職員2名、(株)創建 職員2名

4 議 題

- (1) 第2次千葉市文化芸術振興計画原案について
- (2) 平成28年度千葉市芸術文化振興事業補助金について

5 議事の概要

- (1) 第2次千葉市文化芸術振興計画原案について
第2次千葉市文化芸術振興計画原案について意見交換を行った。
- (2) 平成28年度千葉市芸術文化振興事業補助金について
千葉市文化芸術振興事業補助金の補助事業選定にあたり講評・意見交換を行った。

6 会議経過

【神野委員長】

皆さん、おはようございます。朝早くからお集まりいただきありがとうございます。

第2次千葉市文化振興計画原案について議論が大詰めになってきていますので、本日もよろしくお願ひします。

それでは次第に従い、議事を進行していきたいと思ひます。本日の議題1、「第2次千葉市文化芸術振興計画原案について」ですが、こちらについては委員の皆様から事前にご意見を頂き、そちらを事務局で整理して本日提示していただひていますけれども、まずこちらについて事務局から説明をお願ひします。

< 事務局説明① >

【神野委員長】

全体として見てみると、語句の軽微な修正、文章の調整、あと、例えばオリンピックパラリンピックに関わる部分に関しては、ちょっとイメージが流動的だった部分が段々と固まってきたことに伴ひ踏み込んだ表現に修正されて、その修正が加わったことにより他の部分にも修正が生じているということですね。あと、文章については、市民目線で書き換えているということがあると思ひます。では、こちらの資料1-2を中心に見て、皆様からのご意見・皆様のご了解を得ながら進行していこうと思ひます。軽微な部分に関しては、確認をするということに留めて、意味が変わったり、付加されていることに関しては、また事務局からコメントなども頂きながら検討していきたいと思ひます。

それでは早速、1ページを見てみましょう。上の「高まっています。このような」というのは、文章の構成上の問題なので問題はないかと思ひます。下の「千葉市に住んでよかったと実感でき、さらに」という部分のご提案があったんですけども入れないということになっています。「相互に尊重し合ひ、多様性を受け入れることのできる」という文言のままという事務局からの提案ですが、こちらについて補足があればお願ひします。

【布施文化振興課長】

その下の結びに書いてございますように、「心豊かな地域社会の実現」を目指し、文化芸術を振興していきたいということで、この延長線上には市の色々な施策等がありますが、そういった施策の行きつく先が、「千葉市に住んで良かった」ということなのかなと考へました。計画策定の目的に書く内容としては文脈がずれてしまうかと思ひましたので、原文のままという形でご提案をさせていただきました。

【神野委員長】

計画策定の目的の内容を全体としてみたら、これは意図として入っているだろうという判断ということだと思ひます。それでいいんじゃないかと思ひますけれど、いかがでしょうか。

【早川副委員長】

私は賛成です。結果として結びついてくるということで、施策を実施した結果をここに書かなくてもいいんじゃないかと思いました。

【神野委員長】

それではこれは原案のままということにします。

それから、2ページの2「人と人との関係」という文の挿入が提案されたけれども、これは入れないという方向ですね。人とひととの関係性についての記載を環境の変化の中に入れるか入れないか。これについても事務局の判断をちょっと補足してください。

【布施文化振興課長】

後半の「コミュニティの再構築」というご提案のところにも繋がるんですが、例えば、コミュニティ施策や対人的な施策に重点を置いたものであれば、最近言われている人間関係の希薄化についてここに入れることに賛同するところがございます。しかし、この「文化芸術を取り巻く環境の変化」という部分においては、ライフスタイルの多様化や社会の成熟化によって価値観が分かれるという表現にこちらも包括されるのではないかということから、原案のままとさせていただきます。

【神野委員長】

「文化芸術を取り巻く環境の変化」と社会的な課題としての人とひととの関係性というのはちょっと文脈が違うだろうという判断ですね。これを注視してないということではないけれども、実際に具体的な施策の中で拾えるんじゃないか、ということですか。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

下の「コミュニティの再構築」にも繋がるわけですが、これも社会全体の課題としてはもちろんあるし、文化芸術を活かす中でそういったものが派生的にプラスの効果をもたらすことはあるけれども、文化芸術について言及するところに入れるということは適切ではないだろうという判断かと思います。これも問題はないかと思いますが、どうでしょうか。

【布施文化振興課長】

こちらにつきましては、基本的に担い手不足の文脈で、交流人口の増加や移住によって他の地域から担い手が入ってくるという文脈です。コミュニティの再構築というと、地域内での人間関係のあり方になり、文脈としてどうかということがありましたので、原案のままとさせていただきます。

【関委員】

1ページ「ICTやSNS等の急速な発展などに伴い新たな文化芸術分野が台頭し」のところす

が、これは本当に「台頭」してるのでしょうか。

【椎原委員】

議事の進行について、9日までに出了された事前意見についての検討をしているところですが、今のようによそれ以外のところも含めて検討した方がよいと思います。資料1全体を見て、「この部分はどうですか」というように審議していった方がいいのではないのでしょうか。時間も限られているので、“てにをは”などは一括して問題なければそのままにして、むしろ大事なのは、原案の内容に訂正が生じた部分が正しいかどうかということだと思ひます。

【神野委員長】

今のコミュニティのところは、検討しなければならぬと思ひました。委員の方から事前に提案があったことに対して、その取捨選択というのが事務局の判断だけで行われていいのか。“てにをは”や文章は事務局に一任していただければと思ひますけれども、それを踏まえ確認をしたうえで、今の「台頭」の部分は、表現としてちょっとニュアンスが強すぎるということと、現状と乖離しているのではないかということもあるでしょうから。

【早川副委員長】

文化芸術というのは今まで地面の底へ入っていたけれど、最近ちょっと盛り上がってきたというような意味でここは書いているのでしょうか。

【関委員】

どうですかね、あんまりよくは分かりませんが、「新たな文化芸術分野が台頭し」とあるときに、新たな芸術というのが…

【早川副委員長】

新たなものと言えるかどうか重要なんですか。

【関委員】

私は、「今までにない別のものが出てきて、それが台頭している」という風に解釈しました。

【早川副委員長】

「今まではあまり勢力がなかったものが急に出てきたよ」という理解になってしまっておかしいということですか。

【関委員】

「今までのものは今までのものとしてあり、加えて別のジャンルのものが来た」という感じに受け取れるんです。

【椎原委員】

私は、それが新たな文化芸術の分野なのかどうかは別として、例えば、フェイスブックやユーチューブなどを使って、一般の人々、アマチュアの方が自分の表現を公開できるようになって、それがメガヒットにつながるとか、ここではそういうことを意味していると理解しました。そういう風に表現の方法が変化して、例えば、映画を自分で公開したら、何百、何千万という人が手軽に見られる時代になったということ「文化芸術の分野の台頭」と表現しているということですよ。

【布施文化振興課長】

そういうイメージです。それが新たな芸術分野かと言われると、映像の世界では従来型なのかもしれませんが、書き方としては「表現手法やアピールの方法が変わってきた」という方が正しいかもしれないですね。もしくは美術の分野だとコンピューターを使った芸術画像というイメージです。

【神野委員長】

「分野」と「台頭」がセットになるから、ある一定の限られた組織的な何かがあるようなニュアンスを与えるような気がするので、例えば、「新たな文化芸術活動が拡大し」とか、あるいは「台頭し」でもいいんですけども、ここは今の意図を汲んで変えていきましょか。

【早川副委員長】

文化芸術の素人から言いますと、ただ今のお話ですとこれは新しい分野を意味するものだと思いますよ。文章をどうするかはお任せしますけれども。

【神野委員長】

それでは、椎原委員からご提案がありましたけれども、ここは確認した方がいいんじゃないかというところを私の方で選りつつ個々の確認をして、あと全体の文言の中で「ここは」というところを再度揉んでいただくという形にしたいと思います。

2ページの下の部分に関しては先ほどの事務局の説明でおそらく理解できるのではないかと思います。要は、担い手の問題の中でちょっと違ったところでの必要性みたいなことがここでは語られるので、ご提案の文章は文脈的に違ってくるということだと思います。

3ページの「人と人が」というところについても、今の事務局の説明でクリアできるのではないかと思います。

【竹下委員】

今の文言を提案したのは私です。市が税金を使って文化施策を積極的に進めていく目的というのは、私は「ここに住んでいてよかったな」と感じる市民を増やすことだと思っています。

3ページのインターネットのところですけども、「新たな価値が創造されるなど」という積極的な評価だけでいいのかということがありました。直接対話する機会が減っているというマイナス面についても注目して、人と人が交流し気を通わせるような世の中にしていくために市は文化施策を積極的に行う必要があると、計画の後半に繋がったんです。こちらについて、プラスの評価だけ

でいいのかご議論いただきたいです。

【神野委員長】

この（２）は、ICT、SNSなどの発達に伴うコミュニケーションの変化というところに焦点を当てているわけですが、プラスの側面だけではなくそれによって損なわれることについても指摘しつつ、施策につなげる必要性があるのではないかというご提案かと思うんですが、こちらについてご意見いただけますでしょうか。

【布施文化振興課長】

ここでお伝えしたかったのは、全く知らない人たちが共通の趣味をもつというだけで繋がるのが出来る世の中が変わってきたという点です。インターネットなどを通じて知らない人が結びつくことによって、新たな価値が出てくるというところですので、文脈がずれてしまうと思い、原文のままとさせていただきます。

【早川副委員長】

私は、原文のままがいいと思います。

【大澤委員】

2「文化芸術を取り巻く環境の変化」というところなので、その先として色々あるかもしれませんが、現状だけについての記述でいいのではないかと思います。

【関委員】

それがすごく台頭しているといわれると嫌なんですけれど、別にそうではないのかなという感じがします。

【神野委員長】

それでは、この部分は確かに、現状としてはこういう状況にあるという文脈ですので、例えば、「SNSとコミュニティのあり方は、様々な課題をほらみつつも注目を集めている」というかたちで、要は諸手を挙げて万歳ということではないことは把握してますよというニュアンスに改めるというのはどうでしょうか。

【瀬崎委員】

インターネットを介しても、例えばスカイプなどのように、フェイストゥフェイスの場合もありますから、一概には言えないですね。

【神野委員長】

それによって救われる人もいますし、一方で、確かに問題のあるところもあるので、このような表現でそのあたりを含ませたいと思いますが、どうでしょうか。

【早川副委員長】

経済情勢を綿密に分析しているレポートではなく、文化芸術振興計画ですから。千葉市の文化を伸ばしていくうえで何をやるかというものなので、ある程度ポイントを絞って、市民に分かりやすく、簡単に書いてもらいたいと思います。

【椎原委員】

2「文化芸術を取り巻く環境の変化」全体をもう一回確かめた方が良いのではないのでしょうか。ここは問題かなというところが皆さんもおありかもしれないので。

【神野委員長】

わかりました。では、この2「文化芸術を取り巻く環境の変化」の中で、ご指摘を取りまとめて事務局で修正した以外のところで、気になるところがあれば教えていただきたいと思います。

【高橋委員】

I C TとかS N Sについて、説明文を入れていただければと思います。知っている人は知っていますが、新聞をつくっていてもシニア世代の方からご指摘を受けることがありまして、スペースの問題もあるので事務局にお任せしますけれども。

【神野委員長】

やはり色々な世代の色々な市民がいらっしゃるので、ちょっと補足で解説があるといいですかね。

【椎原委員】

5ページ「第4次基本方針」のところで、あえて「基本法に例示されている文化芸術の分野のみならず、例示されていない分野についてもその対象とし」ということを強調しているところに僕は違和感を覚えました。“日常的なもの全て”ということを強調したいんだろうとは思っているので、これを消すとかそういう意味ではありません。

それと、「成果指標を次のように設定しています」ということを踏まえているからこそ、計画の後の方で目標値を出すことになるんですよね？すると、こちらについて何らかの説明があってもいいかなという気がしました。

【神野委員長】

言葉が足りないということですね。

【椎原委員】

例えば、「この様な国の施策に則って本市でも」というように、あえて「市もこれに準じて指標を設定する」くらいの文章があってもいいかなと思いました。文化施策の指標は難しいというのはあるのですが。

【神野委員長】

法律に明示されているもの以外も拾っていくんだということが、どう繋がっていくのかちょっと触れられていると、ここの文章が何のためにあるのかが分かる、ということですね。

【椎原委員】

祭りなども対象としているということを強調したい意思があるのだろうなとは思いますが、読んだ人にそれが伝わりづらいという気がしたんです。例えば、美術など文化芸術振興基本法に載っているようなジャンルだけじゃなくて、生活文化として一般に広がっているものも文化芸術の振興の中で捉えるということを強調したいわけですよね？

【神野委員長】

ここでは、前提としての材料を提示しているんだけど、その後にそれがどう繋がっているのかがちょっと見えにくい構造だということですね。

【椎原委員】

そういうことです。

【神野委員長】

事務局で何かアイデアがあれば、ここは状況の説明なので、ここにそれを盛り込むとちょっと言葉的に浮く感じはするんですけども。

【布施文化振興課長】

ただ単純に施策を広げるという部分です。※のような文化芸術という範囲がある中で、今後、今まで考えられなかったものが出てくるかもしれないということで入れた文章です。例えば、食文化であったり生活文化であったり今まで、その領域を広げるというところまでは考えていませんでした。郷土芸能の神楽などをその対象とするか否かについては、ここでは想定していませんでした。

【神野委員長】

そうすると、(4) や (5) のように、こういう状況があるのでそれに沿って施策を展開していく、みたいなことが書かれていればクリアできると思いますが、そこはもともとのイメージとしてどこまで精査されたのかというところからするとそう書けなくなってしまうんですよね。

【布施文化振興課長】

国の付帯決議の背景として、生活文化などを含めるという意味で法律にこの文が挿入されたのであれば、意図はそこにはありません。

【椎原委員】

24 ページの基本姿勢の前文、「様々な文化芸術体験」というところにリンクするんですよね。「鑑

賞型から活動・行動型へ」という基本姿勢を市が打ち出すのであれば、一見あまり支援しなくてもいいように見受けられるものに対しても、文化芸術振興基本法にはこう書かれているんだよと、補強する材料になっていると思うので、もっと前面に打ち出してもいいかなという感じがしました。

【神野委員長】

事務局の説明だと、その付帯決議で出されたような方向性を千葉市が全部文化施策としてやるということではないということですし、それは全部やる必要ないわけですね、取捨選択すればいい。そういった中では、椎原委員のおっしゃったように、ここにこれがあるのはおかしいと。しかし、そのうちでここに力を入れますよ、ということが繋がってこないと、この文章が何のためにあるのかがよく分からない、という指摘だと思います。これがあることがおかしいということではなくて、もう少し精査して、繋がりを明快にすべきだと。

【椎原委員】

そうですね。

【神野委員長】

それはちょっとここで文章を作ると大変なことになるのでご一任いただいて、皆様に再度お諮りするということにしたいと思います。

【早川副委員長】

地域の伝統の掘り起こしということでは、当然、食文化もどこかで触れなければいけないような気がするんですけども、今回の計画では触れてないですね。そのように、全部を網羅しているわけではない、と私は理解しています。

【神野委員長】

そのあたりは、ある種文章に含みをもたせていくようなかたちになりますね。

【大澤委員】

3ページ(3)の「これらにおいて重要なのは」という段落なんですけれども、ここ最後は、「他の文化芸術活動にも言えることです。」と書いてあって、ここにまとめのような文があることに違和感を覚えます。その下にまた「アニメ・ゲーム」という言葉が出てきているので、(1)(2)(3)のまとめとしてこの文章があるとすると、ここにあるのはおかしいかなという気がします。

【椎原委員】

それも今回の基本施策の大きなキーになっていますよね。24ページの「鑑賞型から活動・行動型へ」というのは、事業展開にあたっての基本姿勢の一番目じゃないですか。アニメ・マンガについての記述からこれだけ大きな基本施策を出してくるというのはどうだろうと思います。例えば、美術や音楽など色々な分野で、鑑賞するだけでなく行動するというのが重要になっていて、最近では

教育もコミュニケーション能力を増大せよという方向性になっているわけですよね。それが多分、「活動・行動型」という軸になっていて、この基本姿勢は24ページで第一に出てくるのに、それはどうしてかということはこの計画の中で見てみると、アニメ・マンガの部分でこの理由が突出していて、すごい底の浅い計画に見えてしまう。これについては、もうちょっと対局的に、社会状況のあたりで総括して記載出来ないでしょうか。また、2(3)「アニメ・マンガ等の楽しみ方の拡大」以外で、「鑑賞から活動・行動活動へ」ということを導けないでしょうか。

【神野委員長】

鑑賞から活動・行動型へ移行するということはとても大きなコンセプトになっているので、理念的なもの、透かし見えるようなものが策定の趣旨の部分にあるべきだ、ということですね。

【関委員】

「鑑賞から活動・行動へ」でなくても、「鑑賞・活動・行動」でいいじゃないかという感じがしてしまうんですが。

【神野委員長】

鑑賞がいけないわけではないですけどね。

【関委員】

何でそこを両立出来ないのか、という感覚はあります。

【大澤委員】

プロフェッショナルな人は全然活動出来なくなってしまいますよね。

【関委員】

そうですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

何でも全部やるというのは計画としては少し寂しいので、今回の計画でピンポイントとしてやりたいということとして、鑑賞だけではなく参加活動型のものというキーワードがあるということです。

【大澤委員】

今おっしゃったように、「だけではなくて」が文章に入っていればおかしくないんですけども。

【丸島生活文化スポーツ部長】

表現の問題として、第1章にそういうものが入ってくるといいかもしれないというのはありますね。そうすると、2ページの2の頭書きのところに何かそういう表現があればいいですかね。

【竹下委員】

「鑑賞」と「活動・行動」を並列させるような文章の修正が必要ではないでしょうか。やはり私はアニメ、インターネット、あるいはSNSなどが文化芸術をより身近なものにしている、活動・行動ということを重視される時代にもなっている、鑑賞だけではないということ、2ページの2の冒頭で強調することは必要かなという感じはします。

【早川副委員長】

鑑賞している全員が活動・行動に移るということはないと思います。市の計画ですから、そういう点も踏まえないと。観たら描かなきゃいけない、聴いたら歌わなきゃいけないということではもっと悪くなってしまう。

【神野委員長】

鑑賞中心からの移行だということ、をまず確認をしたいと思いますが、「活動・行動」も幅があって、絵を描くことだけでなく、例えば、展覧会を企画する、一緒にみんなで鑑賞をすることを企画する、あるいはそれについて話をするということも、活動・行動であると私は考えています。そのあたりの理念をもう少し掘り下げた文面を加えると良いかと思います。

要は、鑑賞というのは非常に有難いものを受身的に受け取るというイメージが強くて、そういうことだけではなくて、それについて積極的に自分なりに解釈していくということも活動になると思いますし、あるいは自分たちでやってみることもそれに入るでしょう。新しいジャンルが入ってきて文化芸術の範囲が広がっていく中で、表現とか活動・行動ということに非常に注目が集まっていて、おそらく従来のジャンルにも変化を及ぼしていくという中で、私たちは文化芸術の総体をその現実を踏まえつつ発展させていくということが言いたいことなんだと思います。ですので、2の最初の部分に、「鑑賞中心から活動・行動へ」とはどういう意味を持つのが語られ、「それに沿って他のジャンルに対しても～」ということがニュアンスとして加わるような色合いを付け加えるということで、よろしいでしょうか。

【椎原委員】

そうすると、3のアニメ・マンガのところでは、「鑑賞から活動・行動へ」という記載を控えた方がいいでしょう。アニメ・マンガというところで、この「鑑賞から活動・行動」を使うこと自体が危険なような気がします。おそらく、聖地巡礼などをイメージしていると思うのですが、聖地巡礼は消費であって、おそらく文化活動とは違うと思います。私たちが言っているような、ただ見ているだけではなくて自分で自己表現していくというような意味での活動・行動とは違う。現地に出向いて、「ああ、アニメと同じ風景だ」って写真を撮るのはちょっと違うような気がします。例えば、定年退職したから久しぶりにおやじバンドを結成して活動してみるという方が豊かなイメージだと思います。

【神野委員長】

アニメ・マンガというものを、経済的な波及効果も含めて、千葉市として文化の一部と捉えていく

というのはあってもいいと思うんですけども、一方、ここから「鑑賞から活動・行動型へ」というすごく大きな柱が導き出されるのは、とても危険だろうということですね。今おっしゃっていただいたように、例えば、おやじバンドのようなかたちで自分たちの演奏を通した表現活動をするというのも市民の主体的な表現でしょうし、アートフェスティバルのようなもので市民がボランティアに色々なものに参加することも「活動・行動」ですよ。アニメばかりでなく色々なところで言えるので、もしこれを施策の中心に設定するとするならば、そういう文脈の中で捉えていくべきだというご指摘だったと思いますが、いかがでしょうか。

【早川委員】

例えば、歌舞伎を何百回観に行っても歌舞伎役者にはなれませんが、アニメなどは比較的若い人が完成度や到達点が非常に未熟であるにしても、行動に移りやすい文化だということで、ここでのこの表現を私はすんなり受け入れました。

【高橋委員】

もうちょっと柔らかい表現はどうですか。「鑑賞をきっかけに」とか、「鑑賞するとともに」とか。今の表現はちょっと断定的な言い方かなと、そんな感じがします。

【神野委員長】

それでは、(3)「アニメ・マンガ等の楽しみ方の拡大」はこれについてのみ論じることにしましょう。それでもう一つ、2の頭か最後かどの部分かはバランスを見て考えるとして、「文化芸術活動が鑑賞から活動へとシフトしつつある」ということを文言として入れて、アニメ・マンガだけではなく美術、音楽や演劇など、アマチュアバンドなどについて動向として紹介しつつ、そのことを強調するという風にした方が後に出てくるこの柱の部分の見え方も、バランス的にはいいのではないかと思いますので、ここに関しては事務局と私で工夫したいと思います。

【大澤委員】

鑑賞することも、きちんと一つ重きをおいていただければと思います。

【神野委員長】

鑑賞自体を否定しているわけではないということを伝えるべきですね。

【竹下委員】

「鑑賞とともに」とか、並列するような書き方がいいですね。矢印で完全にシフトする、鑑賞なんて時代遅れみたいな感じではない表現がいいと思います。

【神野委員長】

鑑賞と表現は表裏一体であるというのがあるので、ちょっと工夫させてください。

あと気になるところとしては、22ページ、「千葉市の魅力を感じてもらえるような体験プログラム

など、千葉らしい文化によるおもてなしプロジェクトを検討する」となって、「外国人観光客などを文化的な千葉の案内ができるボランティアの育成など」が削除されていますが、これはどういうことですか。

【布施文化振興課長】

33ページ、34ページへのリンクを考えると、文脈にずれが出てしまっていたので、見比べながら、修正させていただきました。ポイントとすると34ページの3つ目の○、2行目後半「市民としての誇りを持ち、互いに協力し合いながらつくりあげるプロジェクト」について、市民が主体となってつくりあげていくということを念頭にもう一度言葉を整理しました。「ボランティアの育成」と特出しするとそこに捉われてしまいますので、「地域資源、歴史資源、人的資源を活かした体験プログラムなど」という表現の中にボランティアを含みました。ここを整理したうえで22ページを見直し、「千葉の魅力を感じてもらえるような体験プログラムなど」という具体例を一言入れました。

【神野委員長】

「おもてなし」を意識した千葉らしいプロジェクトそのものが大事で、ボランティアや外国人観光客がどうというのがここに出るのはおかしいということですね。

【椎原委員】

たいていオリンピック関連では「プログラム」という言葉を使いますよね。プロジェクトもプログラムもあまり変わらないような気はするのですが、「文化プログラム」というのが一般化しているような気がします。そうすると、「文化プログラム」、「おもてなしプロジェクト」と記載があるのは、プログラムの中におもてなしプロジェクトが含まれていると判断すれば良いのですが、何か違和感を覚えます。

【神野委員長】

おそらく、「おもてなしプロジェクト」というのが大きなくくりとしてあって、様々なプログラムがその中に入ってくるということだと思えますけれども。

【布施文化振興課長】

詳しく分かりませんが、将来的には組織委員会の認定とか認証を受けたものが最終的に「文化プログラム」と名乗れるというような話があるので、ここで「文化プログラム」と謳っているのか正直悩んでいるところがありましたので、部分的にプロジェクトと言い変えたという背景があります。言葉を整理しなければならない部分になるかもしれませんが、イメージとして、「文化プログラム」の中に「おもてなしプロジェクト」があって、その中に「おもてなしの体験プログラム」があるという整理になるのかなと思っています。ですから、おもてなしプロジェクトの中に、例えば、伝統芸能を体験するプログラムなどいくつかのメニューがあるというようなイメージですね。大きな「文化プログラム」という風呂敷の中に将来的に色々なものがセパレートされていくという。

【神野委員長】

国によって外向けに「これらがオリンピックの文化的プログラムですよ」と紹介されるとすると、オリンピックパラリンピックに関する千葉市の施策のトータルがおもてなしプロジェクトだということを決めてしまって大丈夫なんでしょうか。

【布施文化振興課長】

決めきってしまうと危険かもしれないですね。

【椎原委員】

例えば、33ページ「重点プロジェクトの設定」の中では「アートプロジェクト等」と書いていますね。昨今のアートプロジェクトの定義というのはとても広くて何でもありなので、確かに「アートプロジェクト」なんだけど、意味はすごく広くなります。

「おもてなしプロジェクト」「アートプロジェクト」など、語彙が多いので整理した方が良いかなと思いました。「重点プロジェクト」と「アートプロジェクト」と2つプロジェクトがある。「オリンピックパラリンピックに係るアートプロジェクト等」という記載を「アートプロジェクト」というものを知っている人が読んだら、「アートプロジェクトをやるんだ」、「市民参加型のアートプロジェクトを千葉市でやるんだ」と思ってしまうと思います。

【神野委員長】

「アートプロジェクト」という言葉を一般的な名称として捉えるのか、個別の意味を帯びたものとして捉えるのかといったときに、アート関係者は個別の意味として捉える傾向が強いので、この文言は「オリンピックパラリンピックに係る文化事業等を通じて」などに改めた方がいいのではないのでしょうか。要は、まだ何も決まっていない今の段階で、計画に「おもてなしプロジェクト」と明記してしまうと、今後、実際に事業を決めていくときに違う文言を使いづらくなってしまうこともあるかもしれないので、事業名として受け取られないような表現に変更するという事です。

【大澤委員】

カタカナになると途端にそういうイメージになりますが、日本語だとそんなに気にならないので、日本語に訳すといいかもしれませんね。

【早川副委員長】

アートプロジェクトというのは、巻末資料の事業一覧には入っていないんですか。

【布施文化振興課長】

入っていません。

【早川副委員長】

事業一覧にあるのものとは、別の概念なんですか。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

あと、34ページの最後のところは、前で触れられているので大幅にカットしてシンプルにまとめたという理解でよろしいでしょうか。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

委員の皆様、他に気になったところはありませんか。

【早川委員長】

19ページ（2）にある美術館の入場目標数が実績より少なくなっていますが、間違いではないんですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

はい。新基本計画を策定したときに設定した目標値ですので、このようになっています。

【椎原委員】

入場者を増やす努力をしなくていいと見えてしまう。

【神野委員長】

補足を追加した方がいいですね。

【早川副委員長】

もしくは、この目標値を変えるかですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

補足を追加したいと思います。

【大澤委員】

オリンピックについての記載に関して、千葉らしさをアピールするとか千葉を全面に出していこうという気持ちは必要なんですが、それと同時に、外国の方を受け入れる側として他の文化や芸術を共に認め合いながらそれを活かしていくという方向、例えば、将来的に千葉市と姉妹都市とで芸術的な何かを一緒にやろうという意識についても記載があったらいいなと思うんですが。

【神野委員長】

そのような事業も何か盛り込んだ方がいいと。

【大澤委員】

意識ですね。今の書き方は、千葉市を全面に出して自分たちが出て行こう、千葉市を認めてもらおうという路線ですが、相互理解も含めてそういうことを考えたいという方向が計画にあってもいいと思うんです。文化プログラムとして千葉市が姉妹都市の少年少女と何かするという可能性もあるのかなと思います。世界各国の文化芸術も共に共有し合うような文言も一つ欲しいなど。

【神野委員長】

千葉市美術館などが非常に高い実績を出しているの、それらを活用しながら千葉らしい文化でおもてなしをしましょうということは非常に明確に打ち出されているけれども、それに加えて国際的な交流ということも重要なのではないかとご指摘ですが、いかがでしょうか。

【大澤委員】

様々な国の子どもたちの絵を美術館に展示するような交流も今後あるかもしれないので、計画の中にそのような記載が欲しいなと思いました。子どもを持つ親としては、色々な国の子どもとの交流を通じて色々な国を知ってもらいたいと願っていますので。

【神野委員長】

市としてまだ具体的なプログラムの検討には入っていないとは思いますが、このような交流についての話題はどこかで挙がっているのでしょうか。

【早川副委員長】

美術館同士の交流や東京都との連携というのは計画に記載がありますが、海外との交流についてはありませんでしたね。

【神野委員長】

今はまだピンと来ていないでしょうけれども、オリンピックが近づくほど当然のようになってくるでしょうね。行政レベルで交流に関するプログラムがあることで、次の文化発展につながるということも確かにあると思います。交流についての記載は、ある方がむしろ自然なような気がしますね。

【関委員】

東京との連携は進んでいるんですか。例えば、外国の方が「音楽とか演劇はやってますか？」と千葉の人に聞いたときに、「千葉ではこういうのをやっているし、東京ではこういうのをやってますよ」と答えられるのが理想で、千葉のことしか分からないというのはあまりおもてなしにはならないんじゃないかなという気がするんです。だから、東京都との関係がどのようになっている、連携がどの程度進んでいるのか興味深いです。

【丸島生活文化スポーツ部長】

東京都が中心となって九都県市で色々な話は進めていますけれども、具体的に何をやるかというのはまだ全く話し合われていません。東京都を中心に連携してやりましょうという話はしていますが、海外との交流というところまではまだ話をしていません。

オリンピックがあるからということで、姉妹都市と一緒に何かやるということは難しいかもしれません。

【大澤委員】

千葉市は、練習場所として誘致したりしていますよね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

そうですね。ですので、誘致した国との交流というのは当然あると思います。

【大澤委員】

そういったことも含めて、「芸術文化と繋がって」ということも計画に何か一つ入れておくと、より広がるのではないのでしょうか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

重点プロジェクトとして、あまり具体的にこの計画に入れてしまうと…

【神野委員長】

34ページの○3つ目、「互いに協力しながら」というところは、おそらく市民しか指していないと思うんですが、これを外国から来た方々も含め「互いに」と読めるようにすると、拘束力もないけれども、いざこれをやろうとなったときにはここに記載があると言えるという感じになりますかね。

【早川副委員長】

国際交流の手がかりは沢山ありますよね。例えば、学校が海外の学校の児童と交流すると、生徒が生き生きするんですね。国を選ばなければ、児童同士の交流というのは一からはじめましょうという状況ではないと思います。

【大澤委員】

企業にしても何にしても、それをきっかけにして世界と繋がって何かをやり始めるということは今後あると思うんですよ。千葉市はそれを見守るよという姿勢がこの計画の中にあると、そういう企業も活動しやすくなると思うんですよ。

【神野委員長】

この第2次文化芸術振興計画を今年度策定し来年度施行するにあたって、この関連事業は第2次計画がない時点で計画されているので計画の内容と齟齬をきたす部分が当然あります。今後、徐々に

この計画に沿うような形で千葉市の文化事業が変わっていくと思います。何の事業をやるということとここで我々が決めることは出来ないんですが、こういう事業があった方がいいんじゃないかというご意見は委員の皆さんに伺った方が事務局としてもとてもありがたいということですので、この後伺いたいと思います。

この原案について、色々と非常に重要なご指摘を頂いてまいりましたが、その他何かございますか。

【林委員】

計画の構成に関してですが、少し分かりにくいなと感じました。第1章「計画策定の趣旨」で、1「計画策定の目的」、3「計画の位置づけ」、4「計画期間」がここにあるのはいいと思うんですが、2「文化芸術を取り巻く環境の変化」として現状分析のような内容が入っているのは違和感があるなという感じがします。例えば、第2章として環境の変化を取り上げた方が策定の趣旨がより分かるかなという気がしたんですが、いかがでしょうか。

【神野委員長】

第1章の中に2として「環境の変化」を入れた理由があれば、事務局からご説明をお願いします。

【布施文化振興課長】

外部要因としてこのような変化があります、7年前に計画を作ったときから世の中は変わってきています、という内容は、前説的な部分の第1章に入れました。第2章では、それを踏まえてこの計画ではどうするのかということについて、どういう論点でどう整理したかをまとめました。そして、総論部分のまとめとして第3章があるという構成にしています。構成の変更は可能ですので、皆様からご意見をいただければ対応したいと思います。

【林委員】

第1章の1「計画策定の目的」に社会情勢の変化も含めた全体的な流れが書いてあるのに、次の2「環境の変化」で、それをあえて取り出して説明する必要があるのかなという気がしました。第1章「計画策定の趣旨」では、1「計画策定の目的」、「計画の位置づけ」、「計画期間」について述べ、第1章で触れた社会情勢の変化というのはこういうものだとして第2章もしくは別のところで拾い上げていくような構成の方が理解しやすいのかなと思いました。

【布施文化振興課長】

2ページからの2「文化芸術を取り巻く環境の変化」(1)から(6)を、例えば、第2章の1として記載するというのでしょうか。

【林委員】

第2章で現状分析のような項目立てをして、そこで説明した方がいいのかなと感じました。

【布施文化振興課長】

現状分析の次に、現行計画の評価という流れの方がいいということですか。

【林委員】

個人的な感想ですので、お任せしますが。

【神野委員長】

また全体を見る中で順序についても再度確認をしていきましょう。

【早川副委員長】

あまり変えてしまうと、かえって分からなくなるような気がしますけれども。

【神野委員長】

その他についてはいかがでしょうか。とりあえず、今日宿題もいくつか出ましたので、ご意見をいただいたことについては、事務局と私で検討してまた皆さんに報告いたします。

そして、来年度からこの計画が実行力をもつことになるわけですけれども、来年度の事業というのはこの計画がない中で決めざるをえないということで、従来のものを基本的には踏襲するかたちになります。実際に事業を実施するときにもまた色々ご指摘いただくことにはなるとは思いますけれども、それ以降の事業に関して、こういうことが望まれるのではないかというイメージがありましたら、事務局にお伝えいただきたいとします。ご提案がございましたらお願いします。

【椎原委員】

この後、補助金のお話をしますけれども、正直、審査してしまっていて、応募が固定化してきたり、若年層にちょっとハードルが高いのかなということもあって、せつかくの予算なので、もう少しこの計画の趣旨に合うような事業に補助金を支出出来るような政策を打ち出せないかなと思います。予算が限られている中で、新しいことを始めるというのは可能性があまりないような気がしますので。一部の団体が何度も申請してくるのはありがたいけれども、競争性があまりない現状もありますので、補助金事業そのものの見直しをした方が良いのではと感じました。

【神野委員長】

補助金事業の枠組みを再度検討することで、新たな団体が応募しやすい、あるいは現行の事業を主催者が組み直す契機に繋がるのではないかというご提案ですね。

【早川副委員長】

こういう助成事業があるよというPRが本当に行き届いているのかということもあるんじゃないでしょうか。申請が出てきてもいい団体からは申請されていないようです。「別に補助金はいらないよ」というのもあるとは思いますが。

【神野委員長】

先ほど、関委員のご意見にありましたように、2020 年に向けて広域で事業広報をしながらお互いがお互いのことを知っていくことが必要ではないかというのがありますよね。オリンピックの主役は東京ですけれども、それをサポートする形で千葉というものもアピールすると同時に、千葉を経由して東京に行く方も大勢いるだろうという状況もありますので、何か出来たらいいなと思いますね。

【関委員】

計画書を全体的に見ると、「いいものみましよう」、「いい芸術に触れましよう」というのとは違う方向にいつている気がするんです。いいものに触れることで価値観が変わる、他者と出会う、刺激になる、ということがあると思います。「活動・行動」ということについては、それでいいと思うんですけれども、「千葉らしさ」というと、東京に近いということも逆に千葉らしさかもしれないので、オリンピックを契機にもう少し広域で考えてもいいのではないかと思います。

【大澤委員】

賛成です。私は、いいものをみせたいという趣旨でオペラの公演を15年やっているんですが、クラシックということもあって、お客さんが固定化してなかなか広がらないんです。今回も市の補助金の申請を出していますが、子どもの参加型ワークショップを行う中で気づいたことは、それが今まで絶対見に来なかった30～40代のお父さんお母さん方がオペラを見るきっかけになるということです。いくらいいものを見せようと努力しても、「でも私は行かない。」と、皆さん新しいことへ一歩足を踏み出すことをほとんどしないというのが現状ですが、子どもを通じてその親たちにオペラを見てもらうことが出来ました。

今後、オリンピックに向けて事業を展開していく中で、どう市民の人たちに見てもらえるか、参加してもらえようかということに一工夫必要になると思いますが、「交流」や「活動」をキーにすれば有効な場合もあると思います。

補助金もそういう形で何かいいものを核にして、そこに来ってもらう手段として上手く補助金が使えたらいいんじゃないかと思います。

【神野委員長】

子どもを中心に据えていらっしゃるんですが、重要なのは、子どもをどこに繋げていくのかということ意識した事業を考えるということだと思うんですね。自ら主体的に鑑賞活動をする、あるいは演奏家を目指す子もいるかもしれません。子供たちだけの単位ではなくて、親の世代や子どもの友達、そういう人たちの参加に繋がっていく仕組みまでイメージした事業展開というのが求められてくるだろうなと思います。そういうものが展開されて、それが当たり前だとみんなが認識すると、どの事業も奥行きが出ると思います。そして、それをベースにしてプロフェッショナルな人たちが活動できるようになってくるのがとても大事だと思います。

【大澤委員】

補助金制度には、大きな150万円という枠が毎年あるわけじゃないですか。150万円あったらプロフェッショナルをきちんと呼んで、本当に色々な事業が出来ますよね。

【神野委員長】

椎原委員の提案でもあったように、そこをどういう方向に持っていくのか、それを担える人材というのにも同時に育てていかなければいけないということが課題としてありますので、それらをトータルでみて施策展開をしていくことが大事になってくると思います。

【椎原委員】

この計画には劇場法についての記載があって、文化センターを中心にやろうと明確に言っていますよね。劇場法が制定されて文化庁の活性化事業の予算が大きく出ましたが、この事業の申請を千葉県でしたのは県の文化会館だけです。県で申請したのが1件だけということに非常に驚きます。県と市が競合してもいいのになぜそうになってしまうのかというと、企画力が弱いと思われる。本当にこのままでいいのでしょうか？この計画でせつかくそういう整理がされて、劇場等を活性化していこうとするなら、指定管理になっていてなかなか難しいとしても、千葉市文化振興財団とうまく連携しながら、そういう能力のある人を積極的に雇うようなことをしないと、絶対に活性化できないと思います。

千葉市の補助金にしても、150万円の枠では、昔からある団体が続けて採択されて補助金がそこへ支出されるような現状で、いかがなものかなと思います。

【神野委員長】

いくら文章で書いても、実行力がないと出来ませんね。「中核を担う」という表現ですので、千葉市としては自覚をもってやっていきますよということだと期待したいと思います。

【瀬崎委員】

私は、10年前からスペシャルオリンピックというボランティア活動、知的障害者のオリンピックを応援するというで立ち上がったプロとアマチュアの混合のオーケストラに、小林研一郎さんと参加しています。とてもやりがいのあるそのプロジェクトを通して思うのは、文化活動というのはすごく趣味に偏るところがあるんですが、あえてプロとアマチュアの壁を取ったり、障害のことを知らない人と障害をお持ちの方が友人になることで、障害について知るきっかけとなって、自ら興味を持って障害の知識を増やしていくことに繋がる、それこそが文化交流の目的なんだろうということなんです。芸術活動・文化活動というのは年齢制限なく全ての人に参加できるというところに一番の魅力があるので、ただのアマチュアの交流の場としないで、外国からいらした方と市民など、色々な人が交流できるようなイベントをサポートした方がいいと思います。文化意識を高めて世界に平和をアピールする良い機会になると思いますので、文化芸術を何かの意志を持って発信していくプログラムを考えていただけたらと思います。

【神野委員長】

新しい計画の中には「共感と寛容」という柱がありますね。色々な立場・世代の人を繋ぐことを実現出来ればいいというお話でしたので、これは重要な柱になってくるイメージかなと思います。

【関委員】

ただ色々な人たちを集めてもどうにもならないので、そこはプロフェッショナルが入ったりするといい流れが出来るのではないかと思いますね。

【神野委員長】

何を得ていくのかという経験のデザインをそこでするわけなので、どのような運営・企画によって実現するのかということも実は重要であるということですね。

こういった機会を今後も設けていきたいと思いますので、またご意見をいただければと思います。それでは、計画原案につきましては、これまでの意見を踏まえて事務局に調整していただきたいと思います。

<< 非公開議事につき以下略 >>